



Messidor Ensemble

メシドール・アンサンブル演奏会

2014年5月25日(日)

ティアラこうとう 小ホール

メシドール・アンサンブル演奏会

リヒャルト・シュトラウス
オペラ『カプリッチョ』より前奏曲

リヒャルト・シュトラウス / ルドルフ・レオポルト
メタモルフォーゼン
23 の独奏弦楽器のための習作（弦楽七重奏版）

————— 休憩（10 分間） —————

ヨハネス・ブラームス
弦楽六重奏曲 第2番 ト長調 Op. 36

第1楽章 *Allegro non troppo*
第2楽章 *Scherzo: Allegro non troppo*
第3楽章 *Adagio*
第4楽章 *Poco allegro*

ヴァイオリン：竹島 愛弓
孫 尚卿
ヴィオラ：林 俊夫
大越 夏子
チェロ：坂本 謙太郎
横沢 康
コントラバス：島田 奈央

2014 年 5 月 25 日(日) 14 時 00 分 開演
ティアラこうとう 小ホール

ある日、喫茶店の隣席から聞こえてきた会話
～曲目解説に代えて～

A：そこでこのチラシ貰ったんですけれどね…こんな人数でオペラの前奏曲が演奏できるのでしょうか？ひょっとして室内楽用の編曲版？

B：ああ、『カプリッチョ』の前奏曲か。編曲版じゃないよ。原曲も6人だけなんだ。オペラの序曲・前奏曲としては史上最小編成だろうね。

A：オペラ自体はオーケストラが演奏するんですよね？なぜ前奏曲だけそんな小編成にしたのでしょうか？

B：『カプリッチョ』の舞台は貴族の館で、この曲はそのサロンで演奏される劇中音楽なんだ。僕が前に見た実演では、演奏者6人は衣装を着て、舞台上で演奏していたよ。

A：なるほど。演奏が始まると同時に物語に引き込まれる演出ですね。でもそれでは困りませんか？序曲・前奏曲は、遅刻してくるお客さん対策と聞いたことがありますよ。

B：モーツァルト（1756-91）の時代の序曲はそういう意味があったようだね。聴衆がわがままな王侯貴族だったから、演奏を始めないと席につかなかったのかも。でもワーグナー（1813-83）、ヴェルディ（1813-1901）辺りから序曲の代わりに比較的短い前奏曲を置いたり、序曲も前奏曲なしにいきなり物語を始めたりするようになった。作曲者が芸術家として尊敬されるようになり、聴衆のマナーが良くなったのかな。

A：でもシュトラウスはいくつも序曲を作曲していますよね？『こうも

り』とか『ジプシー男爵』とか。

B：おっと、それはシュトラウス違い。

『こうもり』はヨハン・シュトラウス2世（1825-99）。こちらはリヒャルト・シュトラウス（1864-1949）。二人は親戚でも何でもない。

A：紛らわしい！！

B：作風も随分違う。ヨハンとその一族がワルツやポルカ、オペレッタなど軽い音楽…今でいえばポップスで活躍したのに対して、リヒャルトは芸術音楽の本流だね。ウィーン国立歌劇場の総監督やドイツ第三帝国音楽局総裁も務めた位だから。

A：第三帝国？そう古くない時代の人そうですね。

B：今年で死後やっと65年だから現代の作曲家と言えるかな。

A：じゃあ「ピー」「カー」という訳のわからない音楽（注：現代音楽のイメージらしい）なんですか？

B：いやいや。彼は「最後のロマン派」と呼ばれるくらいで、聴き易い作風だよ。彼と同時代のいわゆる現代音楽はなかなか演奏されないけれど、シュトラウスのオペラ『サロメ』『薔薇の騎士』、交響詩『ドン・ファン』『英雄の生涯』は世界中の歌劇場やオーケストラの定番演目だ。映画『2001年宇宙の旅』の冒頭に使われた『ツァラトゥストラはかく語りき』はクラシックファンでなくても耳にしたことがあるはずだよ。

A：多くの人に愛されるだけの取っ付きやすさがある訳ですね。もう一曲

は『メタモルフォーゼン〜23 の独奏弦楽器のための習作』。タイトルからは全く想像が付きません。

B：そうだね。普通の弦楽合奏曲は楽器ごとにパートに分かれて、複数の奏者が同じ楽譜を演奏するでしょ？この曲は23人がそれぞれ独奏者として違うパートを弾くんだ。

A：それを3分の1以下の規模に編曲したのが七重奏版ですか？

B：編曲じゃないんだよ。シュトラウスはこの曲を当初七重奏曲として作曲して、仕上げの段階になって23人編成に変えたんだ。忘れられていた七重奏版が1990年に発見され、レオポルトによって仕上げられた。彼らはそれを演奏するのだな。

A：編曲ではなく仕上げなのですね。

B：23人の独奏者を集めるのは大変なので、この曲は演奏会ではあまり取り上げられないし、録音も少ない。でも七重奏版のお蔭で実演機会はいくぶん増えたようだね。今年はシュトラウス生誕150年だけど23人版を演奏したという話は聞かない。でも七重奏版は僕が知る限り、東京だけでもこれが3回目の実演だ。youtubeにも23人版より七重奏版の方が多く載っているよ。

A：事情さえ許せば是非演奏したい曲なのですね。どんな曲ですか？

B：1945年、第二次世界大戦末期の作で、祖国ドイツの追悼曲だよ。

A：ドイツは今も健在ですよ。

B：結果としてはそうだけど、ファシストが始めた戦争で焼野原になっていく祖国を見た当時のシュトラウスはドイツの民族も文化も滅び

去ると思ったのだろうね。

A：追悼の気持ちはどのあたりに表現されているのでしょうか？

B：25分間の曲全体に渡ってさ。ベートーヴェン（1770-1827）の交響曲第3番『英雄』は知ってる？その第2楽章が葬送行進曲なんだけど、この曲はそのメロディを元にした一種の変奏曲になっている。

B：葬送変奏曲…それは鬱な…。

A：まあね。老シュトラウスはこの曲で自分が見てきた祖国の80年間で回想したのだと思う。冒頭第二ヴァイオリンから順に出てくるメロディは1945年の悲惨な状況への嘆き。しばらくして第一ヴァイオリンと第一チェロが明るい旋律を歌う所は幸せな時代の思い出。そこに第二ヴァイオリンが弾く冒頭のメロディでファシズムの暗い影が差す。明暗を繰り返しながら、どんどんテンポが速く、曲調が激しくなっていくのは、滅びに向かって転がり落ちていく祖国。冒頭のメロディが第二チェロに強い調子で再現するところで場面は1945年に戻る。廢墟の街で独り立ち尽くし、号泣するシュトラウスの姿…。

A：ドラマチックですね。ところでメタモルフォーゼンというのはどういう意味なのですか？

B：無理やり訳すと「変容」とか「変態」かな。昆虫が卵〜幼虫〜サナギ〜成虫と形を変えていくように、メロディが移り変わっていくんだ。

A：『英雄』のメロディが？

B：ご明察。しかし面白いのは元のメロディがなかなか出てこない。一般

的に変奏曲では最初に主題となるメロディが出て、それがだんだん形を変えていくんだけど、この曲で主題が出るのは最後の最後(チェロ2人とコントラバスが奏する)。冒頭に出てくるのは元のメロディが3段階くらい形を変えたものだ。

A：つまり卵の状態から始まって、最後に羽化した姿を見せる？

B：まさしく。様々に姿を変えて最後に辿り着くのが『英雄』の葬送行進曲の限りなく深い絶望の空間。

A：それは、また…。慌てて拍手などしないで静かに祈りを捧げたいものですね。しかし、そのまま一人暮らしの部屋には帰りたくないなあ。

B：それは大丈夫。後半のブラームス(1833-97)があるからね。1865年ブラームスが32歳の時、作品が世に認められて、作曲家として波に乗った時期の曲だ。ドイツ民族にとっても、オーストリア帝国とプロイセン王国が力を付け、近代国家に向かっていく上り坂の時期。『メタモルフォーゼン』の中で幸せな時代として描かれる時代だね。

A：初夏にぴったりですね。ところで『メタモルフォーゼン』と違って、この曲には楽章がありますよ。

B：ブラームスは「最後の古典派」だからね。シュトラウスが現代音楽の時代に一昔前のロマン派のスタイルを保っていたように、ブラームスはロマン派時代に古典派の要素を

色濃く残していた。

A：どういことですか？

B：ハイドン(1732-1809)やベートーヴェンなどの古典派時代は、カッチリした構成の様式美が重んじられたんだけど、19世紀ロマン派の時代になるとこういう考え方が薄れていった。芸術家の感性の赴くまま自由に表現して、その結果構成が崩れても良いという考え方になっていったんだ。ベートーヴェンも晩年の弦楽四重奏曲第14番(1826)では7楽章が途切れなく続くスタイルを採ったし、リスト(1811-86)は交響曲の4楽章構成を捨ててより自由な交響詩を作った。

A：その流れの中でオペラから序曲がなくなった？

B：ふむ、そういう見方は面白いね。そんなロマン派時代にありながらブラームスは古典的な様式美を重んじた。4楽章形式は勿論のこと、楽章内の構成や素材の扱い方などもね。例えばこの曲は、第1楽章がソナタ形式、第2楽章は三部形式の舞曲、第3楽章はゆっくりした変奏曲、終楽章はテンポの速いソナタ形式…これは古典派の王道だ。

A：ひたすら保守的だった…と？

B：とんでもない。新境地を拓いた人でないと現在まで生き残ってないよ。ブラームスの革新性はね…

A：ストップ！！それは私が自分の耳で確かめます。

以上は都内某所の喫茶店で交わされた会話を文書化したものです。声の主は不明であり、従って内容に関して音楽学的見地からの真偽は確認されておりません。

メシドール・アンサンブル

「メシドール」とはフランス革命暦にある月の名前の一つで、現在の6月19日から7月18日に相当。初回の演奏会がこの時期だったことが団体名の由来になっている。以来この時期の演奏会開催が多いが、語感の爽やかさとは裏腹に、日本では梅雨に当たるのが悩みの種。

演奏会のたびに「いつか演奏したいと思っていた曲」を携えた有志が集う緩やかな集団を標榜している。楽器編成・メンバーは毎回変わるため、これまでの出演者は社会人・学生・主婦・職業音楽家まで40名にものぼる。

これまでの演奏会

第1回（2002年7月13日 於：新宿文化センター 小ホール）

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第1番 二短調 Op. 49（フルート版）

ブラームス：クラリネット五重奏曲 口短調 Op. 115

第2回（2003年7月6日 於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール）

ハイドン：弦楽四重奏曲 二短調「五度」 Op. 76-2

ビゼー／シンプソン：フルート・チェロ・ピアノのためのカルメン幻想曲

ドヴォルジャーク：弦楽四重奏曲 ヘ長調「アメリカ」 Op. 96

第3回（2004年2月15日 於：新宿文化センター 小ホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 二長調 K. 285

オーボエ四重奏曲 ヘ長調 K. 370

アダージョとロンド ハ短調 K. 617

ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 K. 478

第4回（2004年11月20日 於：ティアラこうとう 小ホール）

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第1番 変ホ長調 Op. 12

キュフナー（伝ウェーバー）：クラリネット五重奏のための 序奏、主題と変奏

シューベルト：ピアノ五重奏曲 イ長調「罇」 Op. 114

第5回（2005年7月10日 於：ティアラこうとう 小ホール）

ヴォルフ：イタリアのセレナーデ ト長調

モーツァルト／ヴェント：フルート四重奏のための『魔笛』より抜粋

チャイコフスキー：弦楽四重奏曲 第1番 二長調 Op. 11

房音くらぶ 音楽祭（2005年8月20日 於：南総文化ホール 小ホール）

モーツァルト：弦楽五重奏曲 第4番 ト短調 K. 516 より第1楽章

第6回（2006年4月30日 於：ティアラこうとう 小ホール）

モーツァルト／ロットラー：木管五重奏曲 ハ短調（弦楽五重奏曲 第2番 K. 406 の編曲版）

ベートーヴェン：七重奏曲 変ホ長調 Op. 20

第7回（2007年5月13日 於：ティアラこうとう 小ホール）

ベートーヴェン：アダージョとロンド（六重奏曲 変ホ長調 Op. 81b より）

ボロディン：弦楽四重奏曲 第2番 ニ長調

モーツァルト：ディヴェルティメント 第17番 ニ長調 K. 334

第8回（2008年6月29日 於：ティアラこうとう 小ホール）

バッハ：管弦楽組曲 第2番 口短調 BWV1067

シューベルト：八重奏曲 ヘ長調 D. 803

美浜音楽祭（2009年3月21日 於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール）

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第1番 ニ短調 Op. 49（フルート版）

第9回（2009年6月21日 於：ティアラこうとう 小ホール）

シェーンベルク：浄夜（弦楽六重奏版）Op. 4

ブラームス：弦楽六重奏曲 第1番 変口長調 Op. 18

第10回（2009年11月22日 於：ティアラこうとう 小ホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 ニ長調 K. 285

プーランク：ピアノと管楽器のための六重奏曲

チャイコフスキー：弦楽六重奏曲 ニ短調 Op. 70「フィレンツェの想い出」

2010年霧降の森ジョイントコンサート（2010年6月13日 於：日光フィンチホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 ニ長調 K. 285 より第1楽章

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第7番く拉斯モフスキー第1番＞Op. 59-1 より抜粋

バッハ：管弦楽組曲 第二番 口短調 BWV1067 より“Badinerie”

第11回（2010年7月3日 於：ティアラこうとう 小ホール）

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第7番く拉斯モフスキー第1番＞Op. 59-1

ラインベルガー：九重奏曲 変ホ長調 Op. 139

第12回（2010年12月12日 於：ティアラこうとう 小ホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第4番 イ長調 K. 298

シューベルト：弦楽四重奏曲 第14番 ニ短調 「死と乙女」 D. 810

ベートーヴェン：クラリネット三重奏曲 変口長調 「街の歌」 Op. 11

J. シュトラウス2世／シェーンベルク：皇帝円舞曲 Op. 437（七重奏版）

第13回（2011年11月13日 於：聖路加国際病院 トイスラー記念ホール）

モーツァルト：クラリネット五重奏曲 イ長調 K. 581

ラヴェル：弦楽四重奏曲 ヘ長調

サン＝サーンス：七重奏曲 Op. 65

第14回（2013年4月21日 於：ティアラこうとう 小ホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第3番 ハ長調 K. 285b

セレナーデ 第13番 ト長調 K. 525『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』

ブラームス：ピアノ五重奏曲 ヘ短調 Op. 34

出演者の横顔

第一ヴァイオリン：竹島 愛弓

幼少よりヴァイオリンとピアノを学び、UC バークレー学士過程、マンハッタン音楽院修士課程卒業。音楽を通じて世界中を旅した後、現在は某音楽事務所に所属。クラシックからヒップホップ、サルサ、邦楽まで国境・ジャンルを越えた活動を展開中。

第二ヴァイオリン：孫 尚卿

ピアノを柳桂子氏、ヴァイオリンを上月恵氏・金田幸男氏に師事。早稲田大学交響楽団で第二ヴァイオリン首席奏者を務める。学生時代に当団主宰者の職場でアルバイト勤務。その働きぶりを踏まえた「君は研究者よりも営業向き」といういい加減な助言を真に受けて、セールスエンジニアとして活躍中。最近結婚して我が世の春を謳歌している。

第一ヴィオラ：林 俊夫

5才よりヴァイオリンを始め、大阪大学交響楽団、大阪モーツァルトアンサンブル、東京ムジックフロー、アンサンブル 70sなどでコンサートマスターを歴任。30代半ばよりヴィオラに取り組み、現在は林徹也氏（元シュトゥットガルト室内楽団首席奏者）に師事。某独立行政法人勤務の傍ら、月何回か演奏会に出演している。

第二ヴィオラ：大越 夏子

音楽活動の誘いは絶対に断らないため、毎週土日は朝昼晩6コマの練習をこなすことも珍しくない。練習後の酒の誘いも絶対に断らないが、

酔っても自分について多くを語らないため、人物像は謎に包まれている。「メシドールの延べ40人の出演者の中で住所も職業も知らないのって彼女だけなんだよな。今時携帯電話も持っていないし…」（当団主宰者談）。

第一チェロ：坂本 謙太郎

13歳からコントラバスを始め、15歳でチェロに転向。菅野博文氏（昭和音大教授）、F.バルトロメイ氏（ウィーンフィル首席奏者）らに師事。アンサンブルムジカ、江東オペラ管弦楽団等で首席奏者を務める。当団を主宰する傍ら、経営コンサルタントとして南方を中心に暗躍中。

第二チェロ：横沢 康

ピアノ教師の母の下、幼年期から音楽に親しむ。北海道大学交響楽団でコントラバスを始め、全国転勤を繰り返す金融機関への就職を機に、持ち運びやすいチェロに転向。全国（除東京）を股にかけて活躍。東京転勤後オーケストラ・ディマンシュで当団主宰者と知り合い、以来都内に活動の場を広げている。

コントラバス：島田 奈央

中学校でコントラバスを始め、高校の管弦学部では部長として天下をとる。大学のオーケストラに入団するも一度知った天下の味を忘れられず1年で退部し、十代のうちから社会人オーケストラに参加。コントラバス奏者の常として、ジプシーのようにさまざまな音楽団体を旅しているため、東京の音楽界での顔はやたらに広い。

当ページの内容は若干の誇張と多分な言葉遊びを含んでいます。



メシドール・アンサンブル 第16回演奏会

2015年5月24日（日） 14:00 開演

於：ティアラこうとう 小ホール

詳細は随時当団ウェブサイトにてお知らせします。

<http://artist.musicinfo.co.jp/~messidor/>

